
Chemical Wood

夏奈悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C h e m i c a l W o o d

【Nコード】

N 4 3 3 4 Y

【作者名】

夏奈悠

【あらすじ】

第四次世界大戦が終戦して、5年がたった。

人間は今だに肉食型植物『ケミカルウッド』との攻防戦を繰り広げている。ある一人の少年——橘 道理は日本最後の砦、機械都市・空蟬で迷い込んだケミカルウッドの討伐をしている。しかし、ケミカルウッドの研究をしている道理の父親の地下室で道理はケミカルウッドの“真実”を知ってしまう・・・それに追い打ちをかけるように、空蟬に世界に数匹しかいないケミカルウッドが侵入して・・・

序章・近未来の出来事（前書き）

まずは序章から・・・

楽しんで下さい。

序章・近未来の出来事

2050年の日本、いや、正確に言えば世界の支配者は人間ではなくなった。

宇宙人？魚人？地底人などなど、疑問は諸々あるだろう。だが、まずは順序を通して説明しよう。

まず、核兵器が各国で乱発されていた第二次世界大戦が終戦して一ヶ月。

日本は、10ヶ国と『世界交戦国再高論同盟』と言う同盟を結んだ。

こうして、誰もが日本に平和が訪れて、心の底で安堵をしていた。しかし、ある時植物が人間に食らいついた。

その植物は後に『始まりの原点』《オリジンケミカル》と呼ばれる。

そのオリジンケミカルは恐るべき速度で繁殖し、たちまち世界の支配者は人間から植物へと姿を変えた。

ある学者は、突然変異と考え。ある学者は、地球外生命体と考える。

真相は今だ謎のまま、今日も人類は肉食型植物『ケミカルウッド』との攻防戦を繰り広げている。

第一章・日本民間陸軍討伐組

『橋、前方五〇メートル先にランクBのケミカルウッドがいる。直ちに討伐せよ！』

通信機越しの親友・せいじょうもしろ成城盛城の聲が平然と聴こえてくる。

『OK。こちら橋 たちはなとつり道理。ランクBケミカルウッドの討伐を開始します』

OK。のニュアンスを変えながら、道理は腰にかけていた鞘から黒刀を抜き出す。

ここ、機械都市・“空蟬”『うつせみ』は、肉食型植物『ケミカルウッド』と攻防戦を繰り広げる日本最後の砦。

『ぐああああああああおおお！！！』

全長二・五メートル程のケミカルウッドは触手をうねらせ、咆哮を上げる。そのケミカルウッドは、四つの触手につばみの状態で顔を隠している。

『全く、なんと言うか・・・品が全くと言う程ない。神はもっと美しく創造できなかったのかよ・・・』

ワイシャツ、ネクタイ、セーター、通学鞆という、バリバリ高校生の帰宅途中の格好の道理は少しも動きずらい仕草を見せずに、ケミカルウッドに勇敢にたちむかつて行く。

『成城！あいつの特徴は？』

道理は通信機のスピーカーに向かって問い掛ける。

『ちよつと待つてろ・・・』

通信機越しにカタカタとパソコンのキーボードを打つ音が聴こえてくる。

すると突然、目の前のケミカルウッドが二本の触手を同時に振りがざず。

『あつぶねえー！！』

道理はそれを察知したかの様に一足先に身体を後ろに反らす。そ

の弾みで触手が鉄塔を薙ぎ倒し、足場が崩れる。

『橘、“民間陸軍”の情報組の本部がケミカルウッドに破壊されていて、情報が經由できない！』

日本民間陸軍討伐組——略して“民間陸軍”はケミカルウッドを倒すため、機械都市の民間が召集されて、その中でも選りすぐりの面々がこの民間陸軍なのだ。民間陸軍にも色々役割がある。討伐組、情報組、研究組、医療組、防衛組の五つの種類がある。一言で言えば、エリートの中のエリート。

道理は足場が崩れたことで、通信機を落としてしまう。

『おい・・・橘、聴こえてるか？返事しろ！！おい橘、橘　道理！』

道理は通信機を落とした事には気が付いておらず、成城の声は全く無意味となっていた。

「生意気な植物め・・・たかがランクBなっただけで・・・」
ケミカルウッドにもランクというものが存在し、下からランクD、C、B、Aとなっている。だが、人間もAランクのケミカルウッドを機械都市に素直に入れる程馬鹿ではないので、縦幅六〇メートル、太さ五〇メートルの壁に機械都市を囲み、ケミカルウッドが侵入できないようになっている。

「てか、成城！さっさと情報よこせよ！」

残念なことに道理の言葉は成城には届かず、虚空に掻き消された。
「シシヤヤヤヤアアア！！」

ケミカルウッドは道理の黒刀を見て、つばみが開き威嚇をする。

「くそッ！どっかに通信機を落としました・・・」

道理は通信機を落としたことで取り乱したが、すぐに冷静になり、黒刀・黒椿を鞘にしまう。刀はケミカルウッドを威嚇するからだろうが、道理は瞳を閉じて小さな息を吐く。

「このケミカルウッドは、つばみを閉じている・・・攻撃時はつばみが開き、触手を振りかざす。じゃあ、このケミカルウッドの弱点はどこだ？」

その時、目の前のケミカルウッドが触手を振りかざす。

道理はそれを予知したかのようにその場に俯せになり、攻撃を避ける。

「まあまあ、落ち着きたまえ……。ケミカルウッド。しかし、君は単純明確純情な性格だな。おかげで分かりやすい」

いきなりケミカルウッドに向けて、道理は気持ち悪いぐらいに敬語を使い、鞘にしまっている黒椿の柄を握りしめる。

周りの音が消え、道理とケミカルウッドに沈黙が生まれる。ケミカルウッドも道理の様子を不思議がり間合いをとる。

そこからつぼみを開き、ケミカルウッドが触手を道理に振りかざす。

音なき場所に敵意はない……

黒椿流・居合――

「錯消夢幻!!」

ケミカルウッドの触手が道理に届く直前に、道理が恐るべき速度で跳躍し、開いたつぼみのド真ん中を十字に切り裂く。

切り裂かれたケミカルウッドは四本の触手を地面に垂らす。

「あー、聴こえるか成城？こちら橘 道理。ランクBのケミカルウッド討伐完了。直ちに帰還する……」

落とした通信機を拾い、成城に報告する。

その時、切り裂かれたケミカルウッドが再び触手をうねらせ、奇声をあげる。そして、道理に向けて二つの触手を振りかざす。

ケミカルウッドは生命力は半端ではないが、弱点を突かれたら大抵のケミカルウッドは死んでしまう。だが、今回は切り裂くポイントがズレていたのか、弱点ではない所を切り裂いたのかは定かではない。

「な……」

突然の不意打ちに身体が硬直する道理。「あー、死ぬな……」

と、道理が目を開じ、悟る。

しかし、触手は道理の頭の目の前までできていたのだが、道理には直撃しなかった。

そのかわり、聞き慣れた二挺拳銃の銃声が周りに木霊するだけ……。

道理は恐る恐る目を開けると、そこには一人の少女が仁王立ちをして道理を見下ろしている。

「な、難波！？なんで……」

難波と呼ばれたセミロングの少女は道理に近、耳元で怒鳴る。

「なんでもかんでもないわよ！！全く、

なんでも一人で特攻するからこんな事態になるのよ」

彼女の名は、難波 南。なんばみなみ道理と同じ日本民間陸軍討伐組の討伐組一員。

本人は医療組を志願していたが、討伐実施訓練の成績がトップクラスだったため、半強制的に討伐組に入れられた。

基本は二挺拳銃を得意とする難波だが、その他にも中距離、遠距離の銃を完全にマスターした。という都市伝説級の成績を持っている。

「成城君が『橘と通信が途中で切れた』て、言ってたから心配して駆け付けてやったのに……」

「仕方ないだろ……通信機を落としちまったんだから」

道理が反論すると、難波は不適な笑みを浮かばせる。

「へー、わざわざ助けてあげたのに礼も言わずに文句ばっか言うんだね。いいご身分なこと……」

逆にその不適な笑みが道理の表情を凍りつかせる。

「僕が悪かったです……難波さん」

すぐさま土下座をして、プライドの維持と死亡フラグを回避する。

「そうそう、いつもそんな風に素直ならいいのになあ」

難波は満足したように笑みを浮かべ、二挺拳銃をしまう。

「他に空蟬に侵入したケミカルウッドは？」

それを見た道理はホツとしたらしく、黒椿を鞘にしまい腰に付ける。

「もう一体は私が倒した。ランクBだったから余裕よ。ぶい」

可愛らしい手でVサインを作る。難波は“余裕”を強調して道理に自慢げに言う。

「ああ、そうかい。君は俺より強いからもう何も言わねえーよ。そういや、成城に用事あるから、情報組支部に一緒に行くか？」

「うん。いいよ、私も討伐報告しなくちゃいけないし」

難波は首を大きく縦に振り、道理と並んで歩き出す。

第一章・日本民間陸軍討伐組（後書き）

いかがでしたでしょうか、Chemical Woodをご覧になって。書き直し書き直しの連続で投稿時間が延びてしまいました。まあ、基本一週間に一回ぐらいのペースで投稿していきたいと思えます。

では、また会つ日まで・・・

情報組支部室

「お邪魔します」

道理と難波は声を揃えて、民間陸軍情報組支部室の扉を開ける。そこには、何十台と並び、重ねられたデスクパソコンが置かれていた。

テレビには、ケミカルウッドが空蟬に侵入したことをニュースで取り上げていた。

その真ん中ぽつんと、一人だけ座ってパソコンと向き合っている眼鏡少年がいる。

「おー、お疲れ」

眼鏡少年は素っ気なく返事をし、素っ気なく左手を上げる。

この眼鏡少年こそが成城 盛城、情報組一の情報収集とパソコン技術を持つている。さらに道理や難波が通っている成城学園の理事長の孫という権力の持ち主。さらに並外れの計算力、推理力の持ち主。やはり、眼鏡をかけると頭が良くなるのだろうか。と道理にとってのこの頃の悩みの一つになっている。

それを察したように成城は椅子を回転させて道理の方を向き、眼鏡のブリッジを中指で押し上げる。

「ランクBケミカルウッド討伐ご苦労様。どうだった？戦って見て？」

「別に何も・・・いつも通り普通のケミカルウッドだったよ」

まあ、正確に訳せば「普通の」というのは、道理や成城から考えると、難波の普通＝難波にとっては普通だけど、俺達にとっては強い、となってしまう。

「大体、なんでケミカルウッドが二体も空蟬に侵入してくるのよ・・・どこか抜け道があるんじゃない？」

「まあ、その考えも一理あるな、けど今、防衛組と情報組が全面出動で調査に乗り上げているんだ」

「結果は？」

「まだ、わかんないらしい……けど、一人の少女の目撃情報があるんだ」

「目撃情報？」

道理と難波が同時に首を傾げる。

「昨日、コンクリートの隙間にたんぽぽが生えていたらしく、次の日にそのたんぽぽを見に行ったら、たんぽぽがなく、その帰りにケミカルウッドを見かけてしまった。ということ言ってたな」

「……超どうでもいい話だな」

「ああ、電話で三〇分以上も聞かされた」

成城は会話を終わると、またパソコンに向き合いカタカタと音をたててパソコンを操作する。

「今回のケミカルウッドの死体はどこに持って行かれるんだ？」

「無論、民間陸軍の研究組に決まってるだろう」

成城はパソコンを操作しながら、答える。

「そのケミカルウッド、生命力が半端なかったぞ」

その言葉に疑問と好奇心を抱いたのか、また、椅子を回転させて眼鏡のブリッジを押し上げる。

「と、言うത്？」

「いや、切り所が悪かったって訳じゃねえーんだけど、そのケミカルウッドの弱点であった花の部分を切り裂かれて、倒れ込んだんだが、何故か起き上がったんだ」

「そこを私が二挺拳銃で倒したの」

難波が補正する。

「……」

成城がしばし考え、口を開ける。

「ここで一つ仮説を立てよう。まず、そのケミカルウッドは特種ケミカルだ」

特種ケミカル——特種細胞ケミカルウッド。

普通のケミカルウッドとは、異なる能力を持つケミカルウッド。

現在確認されている中でも移動速度が速い、跳躍力が高い、攻撃技が独特、などが特種細胞ケミカルウツドの定義になっている。「恐らく、生命力が極端に持続することに進化したケミカルウツドだろう。そのケミカルウツドがランクAだったら、空蟬は一部のエリアは壊滅しかけていただろうな」

ランクAのケミカルウツドは一体倒すのに、通常の民間陸軍の討伐組が百人はいなければ倒せない。

「ああ！わかったわかった。別にそんなつまないことを聞きに来たんじゃないの。討伐報告しに来たのよ」

難波は椅子に座って足をばたつかせる。

「そうそう難波、今回は一、一だぞ」

「はあアホ？どう見ても私が貴方のターゲットを倒したわ。だから、貴方の報酬は私の物。私の報酬は私の物」

「はっ！ジャイオンみたいに言ってんじゃねえよ。ただ、とどめを刺しただけだろ！」

「もう2055年なのによくそんなアニメ知ってんな・・・」

「成城は黙ってて！！！！」

成城が静止させられる。

あの第三次世界大戦で日本の文化はほとんどが壊滅状態に陥っていて、この頃はようやく二〇年代前半の生活を取り戻している。

「ああ、わかった。難波の討伐ポイント上げとくわ」

成城はうんざりとした顔で口を挟む。

「おおい！成城くん！？何言っちゃってんの？そこは僕に味方するんじゃないのかな・・・」

「いや、難波に媚び売った方が・・・後々役に立つし」

道理に胸倉を掴まれるが成城は目を逸らし、横目で難波を見る。

道理は、

「この裏切り者～～！！」

と、声を枯らして涙を拭う。

「けど、実際に倒したのは私。何か異論でもお有りですか橘道理君

？まあ、そのチキンマイハートで何ができるのかな？」

豪快な嫌味つたらしの言葉を吐く。そして、満面不適な勝利の笑みを道理へ向けて放つ。

道理はその笑みに背筋がゾツとして慌て床に座る。

「僕が悪かったです・・・難波さん」

道理は土下座をして再びプライドの維持と死亡フラグを回避する。

「そうそう、さすが物分かりがいい。というか、話変わるけど、返事まだ？」

道理はギクリツと肩を震えさせる。

「返事・・・？」

成城がこれまた疑問と好奇心満載の瞳で道理と難波を見返す。

「いやいや、話変わりすぎだろ・・・」

道理はそう言つと、支部室の冷蔵庫から缶ジュースを取り出し、蓋を開ける。

「だって、告白してから一週間もたつんだよ。有り得ない・・・」

「ああ、難波に愛の告白に対して橘が一週間も女の子を待たせてるのか・・・ふっ、最悪だな！！」

成城は道理に軽蔑の眼差しを送る。

「いやいや、なんか盛大に誤解をしているようだな成城盛城」

道理がその言葉に対して冷静に対処するが、難波は慌てて、

「ちよっ！せ、成城君、何言つてんの！？こ、こいつと？このもやしみたいな奴と？有り得ない有り得ない・・・絶対ない・・・引くわ・・・」

と、あからさまに動揺して否定する。

それと引き換えにさっきまで冷静だった道理の感情が奈落の底へ堕ちていく。

「な、なあ成城・・・俺ってそんな漢として魅力ないか・・・？ああ、漢って男子の“男”じゃなく、漢字の“漢”だぞ・・・」
相変わらず、打たれ弱いと言うのか、チキンマイハートと言うのか、芯が脆いと言うのか・・・結論を言つと、『道理は脆い』

成城は道理にそつと手を置き、言う。

「おい・・・戻って来い！大丈夫だ、橘は魅力たっぷりだ。運動神経抜群、それに秀才、まさに才能の無駄遣い！」

まさに、を強調して満面の笑みで言葉を漏らす。

「最後の一言はスルーしておこう。立ち直れなくなるから・・・。しかも、顔とか褒めてねえ！」

それより難波、俺は『その二つの名の者』《ザ・パースン・オブ・レジェンド》には参加しねえぞ」

『その二つの名の者』——ザ・パースン・オブ・レジェンド・・・成城学園の恒例行事の民間陸軍討伐実技訓練行事。

おおまかには、二人一組のチームになり、実技訓練用のランクB以下のケミカルウッドをいち早く倒し、攻撃時の対処方などの評価で高得点を取ったチームが優勝となっている。

優勝景品は毎年違うらしいが、その分毎年豪華な代物らしい。

「えー、いいじゃん！じゃあ、私が遠距離武器でやればいいんでしょ」

「ダメだ、そしたら余計俺が目立たない・・・」

そう言つと、道理は缶ジュースに口をつけ、飲む。

「あー、私も飲む！」

難波が道理から飲みかけの缶ジュースを奪い取り、口をつける。

「おい、俺少ししか飲んでねえぞ」

そう言つと、二人の缶ジュース争奪戦の幕が上がる。

この二人、傍から見ると、ラブラブのバカップルみたいだが、本人達はそんな一切自覚してはいない。

そんな光景を呆然と見ていた成城は目を細めて二人に問い掛ける。

「もしかして、デート帰り？」

そんな微笑ましい彼らを夕陽が照らしていた・・・

情報組支部室（後書き）

お久しぶりです・・・
よくよく考えてみると、“成城 盛城”って遊び心でつけた名前を
普通に投稿しちゃった・・・

北エリア3番地

この機械都市・空蟬は四つのエリアに別れている。

北エリアが住宅街、商店街。南エリアが海岸に面していて、ショッピング街や大型企業の高層ビル。西エリアが学習施設、またはその寮。そして、東エリアには民間陸軍の本拠地がある。

さらに細かくすると、空蟬は1番地から30番地まで分けられている。

空蟬は元東京都の半分ほど面積の広さで、約五万人が住んでいる。しかも、その三分の一が民間陸軍に属している。

橘 道理は今、北エリアの3番地を歩いていた。

成城のいる情報組支部を出て、地下鉄に乗り、難波と分かれ、帰宅する途中。

空蟬内部の移動方法は基本的に地下鉄になっている。

「豚肉よし、白菜よし、エリンギよし、これで全部だな」

道理は細かく食材の名前が書かれている手帳を見ながら、呟く。

難波とは途中で分かれ、自宅近くの商店街に足を踏み入れている。

「帰るか・・・」

道理は人が賑わう表通りを避けて、薄汚い裏通り歩いていく。

道理の黒椿を腰にかけている。という事もあるが、1番は帰宅がてらのパトロール、それも民間陸軍の仕事となっている。

何か異常がないかを確認し、裏通りを抜けて人気のない表通りに出る。そこにはマンションやアパートがちらほら並んでいるのが見える。

空蟬の住民の大半がマンションやアパートに住んでいる。空蟬の土地面積が少ないためらしい。そのため、住民の人々の中では土地の買収は高額になっている。

道理はマンションの合間を縫うように歩みを進め、マンションの行列を抜けて、その隣の平屋建ての一軒家の玄関を開ける。

「ただいま」

家に入るなり靴を強引に脱ぎ捨て、リビングを通り過ぎ、キッチンに向かう。

橘家は道理と父親の二人暮らし。道理が小さい頃に母親と妹がケミカルウッドに殺され、他界した。

それからのこと、民間陸軍の研究組に所属しているために帰りが遅い父親に、道理は毎日手料理を振る舞っている。

「おお、帰ったか・・・」

別室から背の高い男性が姿を現した。

彼が橘 道理の父親、橘 史朗^{しろう}。

研究組最高責任者——もっと正確には、日本民間陸軍討伐組の五本指に入る権力者。

「ただいま、今日早かったんだ」

「ああ・・・それに比べて、お前は遅かったな。さつき、ケミカルウッドのニュースやってたが、仕事でもしてきたか？」

極端に低い声を発するのが史朗の最大の特徴。

「そうだよ。多分、明日辺りにそのケミカルウッド、研究所に運ばれてると思う」

「そうか・・・」

道理はトントんと包丁でリズムを奏でながら、今日のメニューを頭の中で考えていく。

史朗は新聞を広げ、コーヒーを満喫している。

今日は紅鮭の塩焼きと和風サラダにしよう。と、道理は綺麗に整った出刃包丁で野菜を切っていく。

「ところで、『その二つの名の者』《ザ・パースン・オブ・レジェンド》には出場しないのか？申し込み締切は今週末だろ。というか、明日までか」

道理は不意にさつき友人に言われた事を再び言われた。

「まだ考え中・・・」

「そついや、優勝景品はハワイ旅行だったな・・・」

「は、ハワイ旅行!？」

道理は驚愕の呟きに身を乗り出す。

このケミカルウッドがうじゃうじゃというご世代、ハワイ旅行――いや海外旅行はうん千万円払わなければ、普通は行くことはできない。

「ああ、ペア旅行で常夏の海でのバカンスらしい」

「……」

んなバカな……

言葉にすら表せないぐらい衝撃を喰らってしまった道理は出刃包丁の手を止め、ポケットからスマートフォンを取り出す。

「ちよつと電話してくる」

そう言つと、道理は調理中にも関わらず、自室へとそそくさと逃げ込む。

道理の部屋には、ケミカルウッドの資料や趣味として集めている漫画やフィギュアがちらほら並んでいる。

二、三回のコールと共に向こうから聞き慣れた友人の声が聞こえてくる。

「もっし」

「ああ、難波か? 支部室で言つてた、『その二つの名の者』に出演するぞ」

「なんで、橘君がそんなやる気になつてるのよ……」

いきなりのテンションに難波はたじろぎと疑問を抱く。

「いいか? 聞いて驚くなよ?」

電話越しだが難波は、早くしろ……と、いいかげな雰囲気が漂つてくる。

「今年の優勝景品が……ハワイ旅行!……なんだ」

道理は雄叫びを上げるように言う。

「は、ハワイ旅行!？」

先程の道理と全く同じ反応をしている。

んなバカな……とか呆然と思つてゐるんだろうな。

「常夏、海、バカンスその他諸々・・・今年の優勝景品は最上級に豪華だ」

電話越しの難波はそれを聞いて、興奮したように声を上げる。

『絶対優勝してやる！橘君、貴方は接近戦お願いね。私は長距離武器でいくから』

「望むところだ」

『ところで、締切明日までだから、私が申し込みしとく』

「ああ、よろしく頼む」

そう言つと、道理は電話を切り、はあ・・・と小さなため息をつき、壁に身体を預ける。

「ハワイ旅行か・・・家族全員で行けたら良いのにな・・・」

机の上には、今は亡き母と妹の写真が飾られてある。

「そうか、出場するのか・・・」

陽も完全に落ちた頃、橘家では道理と史朗が向かい合つて食事をしていた。

「ああ、難波 南つて友人とタッグ組む」

「誰だそれ、恋人か？」

史朗の口から発せられた爆弾発言に対して、道理が動揺を隠せず口に含んでいた味噌汁を吹き出した。

「ち、違う違う。た、ただの友人だつて・・・」

「ふっ、動揺しまくりだな」

史朗はその表情を見て鼻で笑う。

「いやいや、本当にただの友人なんだつて、ほら、研究組でも“10年に一人の逸材の少女！”ってことで話題になったじゃん」

難波は短、中、長距離武器を完璧にマスターしたことで民間陸軍

の中でも一躍有名になっている。

「ああ、あの子か・・・」

史朗は恋人ではないことを残念がった様子で眉を下げる。

「あの子は研究組の中では不審がられてるな・・・」

史朗は何かをふと思いついた様に呟く。

「なんで・・・？」

「なんでも、身体能力が異常過ぎるらしい。全ての科目で平均以上いや、最高点と同じくらいの記録を出しているそうだ」

道理は紅鮭の骨と格闘している。

「ふうん。そういや、そのことに関係あるかわかんねーけど、あいつ小さい頃の記憶がないらしい」

「彼女、小さい頃親に捨てられてでもいたのか？」

「いや、ちゃんと血の繋がった両親がいたよ。5年前に他界したけど」

道理は数回難波の両親に会っていた。

夏の暑い日に難波の家に遊びに行ったのだ、温厚で気ままに話かけてくるロングヘアの優しい女性と無口だが気を使い、道理を家に招き入れてくれる男性。

「今は顔すら覚えてないけど、何度か世話になったんだ」

史朗はしばし考えて再び口を開く。

「そういえば、昔研究組にいたな・・・難波 一夜^{いちや}だったかな」
「同僚？」

「そうなるな。まあ、研究組に入ってきたのは、俺が入った2年後の事だったかな。その後、ケミカルウッドに殺されたらしい」
「ふうん」

道理は味噌汁を口に含む。

ふと史朗は何かを思い出した様に言葉を発する。

「・・・そういえば、道理はもう一七だな」

「ああ、先週誕生日だった」

「そうか。今度俺の地下室を見せてやるよ」

「地下室を・・・？」

この橘家は平山建てだが、地下室が一部屋ある。主に史朗のケミカルウッド研究に使っている。

たまに爆発音が聞こえてくるのが困りものだが。

「ああ、俺の息子がもう一七なら真実を教えてもいい」

史朗の言う“真実”という言葉に道理は引つ掛かった。

「真実って？」

「まだ教えられない。時期が来てからだ。ランクSの・・・」

史朗は箸を止める。

「えっ、最後なんて言った？」

「いや、何でもない」

史朗は何かを隠すように味噌汁を強引に飲み干した。

墓参り&敵襲&射撃

「ん・・・どっか行くのか？」

午前9時を廻った頃、ようやく起きた史朗は私服に着替えていた道理を見て言った。

「ああ、墓参り行ってくる」

道理は母親と妹を幼い頃に亡くしている。

「そうか、俺も行かなくちゃな。半年近く行ってないな」

小さく欠伸をする史朗は豪快に背伸びをして呟く。

「一緒に行く？」

「いや、今日は研究資料をまとめる仕事があるんだ。それとライター持っけ、線香とかに火つけるとき役に立つから」

そう言つと、史朗は『天国への扉』《ヘブンズドア》と書かれたライターを道理に手渡す。

「どうも。あと、朝食は冷蔵庫に入ってるから、じゃあ行ってくる」

「ああ、あとこの頃は通り魔が多発してるから気をつけるよ」

「通り魔・・・？」

そういえば、前に成城が言ってたな。

「仮面にタキシード、腰には刀を携えているらしい」

「なんだその見るからにに変態を醸し出す様な格好は！」

通り魔の特徴があまりにもユーモアに溢れているので、すかさずツッコミを入れる。

「まあ、姿はどうあれ戦ったら相当強い、第一部隊の夢凍むくもと同等にやり合ったらしい」

討伐組第一部隊・夢凍吹雪むくもふき。空蝉でも五本指に入る強さの兵。

「む、夢凍と同等！？ありえねえ・・・」

「俺もビビったが本人が言ってたんだ。だから、お前じゃ太刀打ち出来るはずないから気をつけるよ」

史朗は無礼な言葉を弾丸の様に道理に突き刺す。

「いや、そこまで言わなくても・・・まあ、行ってくるわ」

道理は玄関のドアを開け、建ち並ぶマンションを抜ける。商店街を通り過ぎ、道理は階段の続く地下を進み、電車に乗る。目指すは南エリアのはずれ、29番地。

ケミカルウッドとの攻防により、多くの死者を出してしまった第三次世界大戦後の『第四次世界大戦』

そのため、今の民間陸軍の各組では第一部隊から第九部隊の九つの部隊がある。

電車の中は満員近くに達していた。

休日ということもあるが、大体の人が仕事のため北エリアから南エリアに出勤するため、平日は超満員状態になる。

その時、不意に道理のケータイのバイブが鳴る。『難波南』と、ケータイには表示されていた。

「（おう、どうかしたか？）」

さすがに電車の中はまずいので、声を潜めてケータイを耳に当てる。

『あ、橋君、もう申し込みしたから』

「（おう、サンキュー。お前今どこにいるんだ？）」

『今、パトロール中。なんで？』

「（いや、俺、成城の所に用事あるから一緒にみたいな・・・）」

『悪いけど今は無理、あと、ちゃんと練習しとくんだよ。この前みたいなへましたら許さないから。じゃっ！』

ブツという音と共に電話中の表示が待受画面に戻る。

そのあと、電車に30分程揺れると、南エリア28番地に到達する。

「はあ、29番地には駅がないんだ・・・毎回忘れるんだよな。歩くか」

29番地は全体が墓地なので、電車は走ってない。なので、28番地から徒歩で行かなければならない。

大型企業の高層ビルが建ち並ぶ南エリアは海に面していて、漁業

等も盛んになっている。

もちろん、ケミカルウッドが海から侵入してこない様に海の中には対ケミカルウッドの有刺鉄線が張ってある。

「やっぱ、南エリアは人が凄いな・・・」

道理はスクランブル交差点にこつた返す人の数を見て、絶句する。南エリアの大型企業は、野菜の人工栽培やケミカルウッド対策研究などが多く、主流となっている。

「こんな所に通り魔がいるなんて考えたらぞつとするな」

道理は独り言を呟き、背中がぞつとする。

その時、道理はふと高層ビルに設置されている大型モニターに目を奪われていた。

そこには

『速報！日本時間今日未明、フィリピンの機械都市・スチールウォールがケミカルウッドの手によって滅んでしまいました。フィリピン人は最後の悪あがきにスチールウォールにある核兵器を乱発し・・・』

と、フィリピンでの絶望的なニュースが取り上げられていた。

日本以外にも約50ヶ国の機械都市がある。その中でもこの空蟬は色々な意味で世界最前線の機械都市。

「なっ！あの鉄壁のフィリピンが破られただど！？ランクAのケミカルウッドが何百匹集まろうとその壁は破れないと、有名なのに・・・」

道理は驚愕のニュースを見て、無意識に言葉を発しまった。そのせいで周りの人達に不快な視線を浴びせられていた。

道理はその視線を避けながら、そそくさと人がこつた返しているスクランブル交差点を抜ける。

5分程、人気のない通りを歩くと『鳳雷寺』と書かれた看板と巨大な寺が姿を現す。

ここが29番地の墓地。

何万と墓石が並んでいて、何とも言えない威圧感を漂わせる。

道理は橘　ゆり香と橘　くいなと書かれた墓石の前に立ち、拝む。
「久しぶりだな母さん、くいな。俺、討伐組に入れたよ。あれ、前も言っただけ……」

線香に火をつけ、再び拝む。

「じゃあ、今日は他にも用事があるから」

道理は名残惜しく墓石に背を向け、ケータイを開く。

「確か、成城は今日もあの支部室にいたはずだな」

手慣れた手つきで成城　盛城宛てに電話する。

十回程のコールの後に友人の忌ま忌ましい声が飛び込んできた。

『ふあい、ほおちら成城』

「あ……寝てた？」

どうでもいい話、成城は基本昼に寝て、夕方から夜にかけて活動するタイプなので、この電話で強制的に起きたらしい。

『「あ……起きた？」じゃねえーよ！俺が昼間寝てるのは分かってんだろ……まあいいや、用件は？」

もう勝手にしろよ……といったげの成城は就寝を邪魔した道理の用件を問う。

「ああ、ちよつと調べて欲しいことがあるんだ……今から行つていいか？どうせ、支部室で寝てんだろ？」

成城は一年の大半を支部室で過ごしていて、寮を出たら最低でも一ヶ月は帰って来ない。

『調べて欲しいこと……？』

「そう、例の通り魔のことなんだ……」

数日前、成城が言っていたこと、今朝、史朗が言っていた通り魔のことを思い出す。

その時、

「いい刀だな……」

不意に後ろから、声をかけられる。

『ああ、あいつのことか。橘も気を……』
つけるよ。と言う直前に道理は強引に友人との通話を切る。

「わりいな成城。無理だわ……。なあ、変態通り魔さん」

後ろには、刀を鞘に収めて、仮装用の仮面をかけて、タキシードを着ている通り魔が立っていたことは言うまでもない……

「どのどいつかと思ったら、第一部隊の夢凍と同等にやり合った変態通り魔さんじゃないか」

「これはこれは、変態通り魔さんとは無粋だな少年よ」

例の通り魔は（実際はわからないが多分）苦笑の表情を浮かべる。

「どうしたんだ、こんな真昼間から」

道理は至つて冷静に通り魔に話し掛ける。

「いや、いい刀を携えているな・・・と思つてつい話し掛けてしまつた。」

その言葉に置ける殺気と威圧に道理は警戒し、話を続ける。

「そりやどうも、てかあんた名は？」

少しでも情報がわかれば、成城のパソコン技術で住み処ぐらいは特定できる。

「ああ、失礼、
まずは自分の名から名乗るのが紳士の礼儀というもの。
私は影黒紫電。貴方は？」

紫電は深々とお辞儀をして道理の名を問う。

「俺は橘、民間陸軍・討伐組第八部隊、橘道理だ」

「橘、橘 道理か……。いい名だな。それより、君はもしや黒椿流の人間では？」

黒椿流——道理が身につけている流儀の名。

「ああ、俺の祖父が俺に黒椿流の流儀を教えてくれた」

「おおそうか！やはり、黒椿流の意思は滅んでいなかったのか・・・
・そうか、実は私も紅桜流^{あかざくら}の最後の人間なのだ」

紫電は喜びの声を上げる。仮面を被っていて、その素顔は見えないが満面の不気味な笑みを浮かべているだろう。

「紅桜流？じゃあ、なんであんたの姓は影黒なんだ？」

「これは、母親の姓なんだ。私は軽く紅桜を名乗ったりしない」
「俺も同じだ・・・」

特に話すことがなくなり、辺りを沈黙が支配する。

「情報収集はおしまいか？」

「ふっ、気づいていたのか・・・」

道理は気づかぬ内に嫌な汗をかいていた。それを手の甲で強引に拭く。

「じゃあ、こちらは遠慮なく行かせてもらうよ。黒椿流の力をとくと見させてもらう」

紫電がその言葉を口にした瞬間、殺気と威圧が道理へと襲い掛かる。

紫電が鞘から紅桜を抜く。

来る！！

「紅桜流・如月」

そう呟いた瞬間、紫電が爽快なステップで瞬時に道理との間合いを詰める。

紅桜流・如月の最大の特徴は剣道における一撃必殺、“突き”。

紫電は道理の顔面目掛けて、紅桜を突き刺す。

耳を欺く嫌な音と共に道理は如月をギリギリのところで黒椿で受け流し、瞬時に黒椿を鞘に収める。

「あつぶねえー！！」

紫電は受け流されたことに驚愕し、道理が受け流した事で防御が出来ない状況だった。

「むっ・・・」

黒椿流・居合――

「月光等乱!!」

道理が瞬時に鞘から黒椿を抜き、半円を描く様に下から上へ黒刀で切り上げる。だが、防御がままならなくなつた紫電は後ろに跳躍し、月光等乱を避ける。

「ほう、受け流しに居合斬りか・・・実に面白い」

紫電は乱れたネクタイを直す。

「ああ、黒椿流は居合斬りと相手の技の受け流しが主流なんだよ」
道理は黒椿を鞘に収める。

「じゃあ、こつちも本気で行こう。紅桜流の真骨頂は“突き”なんだよ」

「ふっ、フェンシングの間違いじゃねえーのか？」

そう言つと、道理が再び月光等乱を繰り出すとする。

しかし、道理が月光等乱を繰り出す直前に紫電が道理の手を蹴り上げ、黒椿が宙に浮く。

「くそっ!!」

道理は手と黒椿を弾かれて紫電の目の前で無防備となつていた。

「紅桜流奥義・神無月」

そう叫ぶと、紫電は再び道理の顔面目掛けて紅桜で突く。

それを道理が自由になつた片腕で防御しようとするが、片腕に直撃した紅桜は、煙のように消える。だが、本物の紅桜はその下——道理の腹部に狙いを定めていた。

「・・・!!? 残像!?!」

紅桜が放たれる。しかし、その瞬間、

「キィィィー」

と紫電の紅桜がガラスが強引に割れるような音と共に弾かれる。

スコープ無しの少女（前書き）

民間陸軍は、日本民間陸軍討伐組です。

ややこしいですが、日本民間陸軍討伐組は陸軍の後の討伐組も民間陸軍の本名に入っています。

スコープ無しの少女

風が吹き荒れる小さな高台では、一人の少女が長距離銃を両手に横たわっていた。

「いた……通り魔」

彼女は長距離銃の引き金を躊躇なく引く。

バッキューンという爽快な音と共に遠くのタキシードの男の刀を弾くのが見えた。

五キロ先の刀を弾くのはかなり凄いが、そんなことよりも彼女――

――難波 南は、

銃のスコープ無しで標的を狙っていた。

しかも、風が吹き荒れる高台の上で。

人間技では到底有り得ないことを彼女は悠々としている。

さすがは、“十年に一人の逸材の少女”と言われる程はある。

「ん……やっぱ、橘君か……」

難波は通り魔の傍らにいた友人の存在に気がついた。

「しょうがないな……応戦しようか」

小さなため息を一つついて、彼女は再び引き金を引く。

「な……だ、誰だ!？」

紅桜が銃声なく弾かれたことを不思議に思うと同時に警戒する。

「あんたは知らないのか? “十年に一人の逸材の少女”――俺の相方を」

「難波 南か……」

紫電は下唇を噛み締め、飛んできた弾丸を紅桜で弾く。

「そう、難波は十キロ圏内の中なら百発百中の凄腕狙撃主なのさ。
いいのか？そんな所に突っ立てて」

紫電をバカにしていると、道理の目の前にいたはずの紫電が煙の
様に消えていく。

道理はまたか！と舌打ちし、紫電を探す。

「それは君の台詞だろ！橘君！！」

消えたはずの紫電が道理の後ろで紅桜を振りかざしていた。

「くそっ……！！」

瞬時に道理が黒椿で防ぐが、力が相殺仕切れず道理が尻餅をつく。
我ながら余裕を打ち噛ますと足元を掬われるな……と道理は思い、
その言葉を口の中で留める。

「あんた、何者だ！なんだその残像は……人間技じゃねえーよ！！」

紫電は仮面に手を当て、くくくつと不適に笑う。

「私は……ケミカルウツドの真実を知った者さ」

昨晚、史郎が言った一言が脳裏に過ぎる。

真実が何とか言っていた。

「真実……？」

「おやおや、橘君の父親は確かケミカルウツドの研究をしている橘
史郎だったよね？」

紫電は紅桜を鞘に収め、人差し指を立てる。

「な、なんで親父の名前を知ってたんだ！」

「もしかして、聞いていないのか？ケミカルウツドの事と私の事と
難波 南の事を」

紫電は何故か難波の名前を出し、遠くに見える小さな小さな高台
を指差す。

「本当にあんた何者だ？なんで難波の名前が出てくるんだ？もしか
して、そのケミカルウツドの真実に何か関係あるのか？」

「ああ、あるとも。だが、彼女の能力は研究の偶然の産物に過ぎな

い。私はその理論から基づいて創られた正規品なのだ。まあ、全て自己的に研究していたのだから」

紫電の意味不明な単語に首を傾げる。まあいい、成城に聞いたら何とかなるだろう。と、道理は頭の隅で考える。

「しかし、あんたの目的はなんだ、単なる人斬りか？」

「いや、そんな無粋な真似は私がするはずないだろう」

まあ、紫電が何の目的もなく無駄にリスクを犯すことをするとは思えない。

「じゃあ、あんたの目的はなんだ、ケミカルウッドには関係あるのか？」

「まだ言えないな、橘君。だが、少なくとも君がケミカルウッドの真実を知る時には、嫌でも知るだろう」

重々しく声を上げ、道理に背を向ける。

「ていうことは、ケミカルウッドの何かなのか……」

「また会おう橘君、いや、黒椿 道理君。今回は私の負けだ。何せ奥義の一つが破られたのだから」

紫電は背を向けたまま立ち去る。

「それはこっちの台詞だ！紅桜 紫電」

道理は小さくなる紫電の背中を消えるまで睨みつけていた。

「本名、紅桜 紫電か」

場所は変わり、情報組支部室。

成城はパソコンのキーボードをカタカタと操作する。

「それがダメなら、影黒 紫電で」

不意に道理のケータイが鳴る。お決まりの様に『難波 南』と今回も表示されていた。

「おう、難波か。さつきはサンキューな」

『あ、橘君？さつきは危なかったね。これで貸し1だよ』

何故なのかはわからないが、電話越しの友人の声は明るかった。

「どうかしたのか？」

『そうそう、『その二つの名の者』《ザ・パースン・オブ・レジェンド》の練習を明日の放課後にするからってことを伝えに電話したの。おーケー？』

今年の『その二つの名の者』は締切日から一週間後に実施予定となっている。

「ああ、わかった。あー、難波」

どうしようか……ここで言えばあれを確実に……あれだな。

道理の脳裏に紫電の言葉が浮かび上がってきた。

（彼女の能力は研究の偶然の産物に過ぎない）と、紫電が放った不可解な言葉が頭の中を駆け巡った。

『どうかしたの？』

可愛らしい声で話かけてくる電話越しの友人。

「……いや、何でもない。じゃあな」

『うん。また明日』

ぶつつ、と通話が切れる。

あんな正直な友人に「ケミカルウツドの真実って何？」などと聞けるはずない。

道理はケータイを睨みつけながら、自分の感情を押さえ付ける。

「おい橘！ヒットしたぞ。やはり、民間陸軍の上層部だ！」

成城が紫電の情報を掴んだらしく、パソコンを道理に向ける。

道理はパソコンに写し出された文字を見て、目を疑う。

「どういう意味だ？」

「だから、紅桜 紫電は民間陸軍の上層部の人間なんだ」

そこには、こう書いてあった。

『影黒 紫電——日本民間陸軍討伐組の総帥・天草 逆祁の側近。あまくささかけ

しかし、側近だけではなく、討伐組、情報組、研究組、医療組、防

衛組の五つの組の情報を操作する情報保管使用人という立場にある』

目の前の驚愕の資料に目を丸くする。

「あの通り魔が……紅桜 紫電が……天草総帥の側近!？」

思わず、道理が勢いよく叫んでしまう。

「どうする？ 橘、今の状況はこれしか情報が無いが、ハッキングすることは可能だぞ」

成城は情報組一のパソコン技術と情報網を持っていて、ハッキングぐらいならお手の物。

「いや、まだいい。紅桜の奴が俺らを嗅ぎ回ってると思うから、ハッキングして捕まったらおしまいだ」

「そうか、分かった……てか、今日そいつと戦ったんだよね？」

成城は少々躊躇いがちに今日の状況を聞いてくる。

「ああ、煙の様に消えて、本物が現れる奇妙な技を使ってきた」

「……それは確かに奇妙だな……到底人間技ではない」

成城は愛用のヘッドフォンを外し、考え始める。

「もっと詳しく教えてくれ。全てだ」

道理は、一言一句間違わず、あの時の状況と台詞を全て成城に話す。

全てを話終わると、成城は上を向きしばし考えをまとめて口を開く。

「……あくまでも仮説だが、紫電は何らかの特殊能力を持っている事は確か。しかも、それを自由に扱う事ができる。しかも、その会話の中から難波と道理の父親の名が出てきている。なら、紫電と何らかの関係があることは確かなんだ。という事は、難波には小さい頃の記憶が無い。それとケミカルウッドの研究と何か関係があり、その情報を紫電が操っている。じゃあ、上層部のお偉いさんもグルかもしれない。いや、民間陸軍全体がグルかもしれない。民間陸軍は紫電を利用して何かをしようとしている。ん……話が脱線してうな。いや、やはり、ハッキングした方が早いな……けど、その特殊能力ってケミカルウッドに関係あるの……」

「ちょっと待て、てか、もう喋んな。俺の頭がフリーズする」

今まで黙っていた道理が視線を明後日の方向に向けたまま口を開く。

そんな細かいことを盛大にぶつ飛ばした意味不明無自覚な仮説は、さすがの道理でも信用できない。

気が付くと、時刻はおやつの間になっていた。

「まあ、結果的にはまた近い内に紫電と闘わなければならない」

成城はお得意のように眼鏡のブリッジを中指で押し上げる。

「まあそうだな。……なあ、まずは原点に戻って考えてみないか？」
「というと？」

「まずは、ケミカルウツドの原点から」

紫電が言っていた。ケミカルウツドの真実を知った者さ、と。

「『始まりの原点』《オリジンケミカル》か……確か、あいつは今は北極にいるんだっけ？」

「南極な」

成城がさかさず補正する。

『始まりの原点』——オリジンケミカルは、名から分かるようにケミカルウツドの祖先と言ってもいい。

もちろん、他のケミカルウツドとは一味も二味も違く、強さ、能力も桁違い。

当時のとある研究機関の研究者達は、「現在の世界最新技術を駆使してもオリジンケミカルだけはどうやっても倒すことは出来ないだが、捕縛することなら可能だ。オリジンケミカルを行動停止させることができるのは、南極の最深部に穴を空け、そこに凍りつけて埋めることしか方法はない！」と、その計画が一年に渡り、実行された。

見事成功を収めた大規模な計画だったが、オリジンケミカルは生命力の持続と再生力が他のケミカルウツドとは比べものにならないくらいあり、今も南極の最深部で凍り付いたままに生きている。

「まだ死んではないんだよな？」

成城はパソコンの方に向き、紫電のことを調べる。

「ああ、らしいな。死んでたら死んでたで、掘り出されてどっかの大型研究所で解剖でもされてるだろうな」

道理は支部室の冷蔵庫を開き、いつもの缶ジュースを取り出し一気に飲み干す。

「なんでケミカルウッドなんて生物が生まれたんだろうな」

意味ありげな言葉を聞いて、成城は透き通った声で言葉を返す。

「まあ、そんな事が分ければノーベル賞並だろうな。てか、親父さんから何か聞いてないのか？」

また、道理の脳裏にあの言葉が過ぎる。

「ああ、何も」

悪戯心が満載の成城は椅子を一八〇度回転させ、不適な笑みを浮かべる。

こういう時の成城はヤバイ。何がヤバイとか、そんな理屈はないが、とにかくヤバイ。波乱な問題を起こす、成城学園の問題児の一人。

「な、なんだよ……その問題児がいいことを思い付いた笑みみたいなのは」

眼を輝かせる成城はデスクパソコンのキーボードを引き出しから大量に取り出す。その数、五つ。

「おい、もしかして……」

眼鏡をかける成城。

成城は普段眼鏡はかけず、過ごしてにいる。眼鏡をかける時は本気を表しているのだろう。

「そのもしかしてだ。ハッキングするぞ！しかも、上層部の情報保管人の所にだ！」

今は天草総帥の側近である紫電が眼を光らせている可能性だつてある。しかも、情報保管人は紫電が管理している。ここは冷静に止めるところだが、道理はニヤつき、

「どうせ、止めてもやめないんだろ？」

と、やめさせる気すらない。

「分かっているじゃないか、相棒」

二人はパソコンの画面を見る。

「じゃあ、やるぞ」

首を鳴らし、成城はハッキングへと取り掛かった。

カタカタカタと素早いキーボードタッチ、画面は道理には理解不能な文字たちが羅列している。

「相変わらず、すげえーな」

感心の声を漏らしたつもりの道理だったが、成城には無駄に目障りらしく、

「ちよつと黙ってて」

と、静止を求められた。

成城は勉強、運動はすば抜けてできるが感情制御が全くというほどできない。

別に悪い意味で言っている訳ではないのだが、自分がやりたいと思う、楽しそうと思うと飽きるまでやり尽くしてしまう非常に面倒な性格。

なので、成城学園では問題児の一人として要注意人物。

ちなみに道理、難波は成城学園の生徒の二年一組、成城が二年二組。

「よし！ハッキング完了」

そう言くと、成城は眼鏡を外す。

一番は早い。一分そこらで上層部のセキュリティをかい潜って情報をだだ漏れにしてしまう。

またしても、二人は目の前の画面の記事を見て、眼を疑う。

『ケミカルウッドの可能性について……』

肉食型植物ケミカルウッドは人類を変える可能性を持つ。

今だ謎に満ちているケミカルウッドだが、研究組の成果により、数年前にある一人の男がケミカルウッドの真実を知った。

しかし、男はこの真実を学会で発表してしまったら、次は世界が危ない。人類だけではなく、世界自体が滅んでしまうと思い、自分で調べたケミカルウッドに関する全ての資料を燃やした。

その男の名は、な――

その瞬間いきなり、がたんとな全ての電源が落ちる。

パソコンも冷蔵庫も支部室の部屋全ての電源が一気に落ちた。

「なっ……」

急いで原因究明をするが、分からない。

外も同様に夕陽と同色になっていた電灯の光が消えていた。街が混乱している様にも見える。

そう、街全体が停電してしまった。

「くそっ！やられた……先に気付くべきだった。相手は権力者、これくらいの事はたやすいと……」

成城がデスクパソコンを悔しがる様に強引に殴る。

すると、すぐにぱつと支部室、いや、街全体の電気が回復した。

デスクパソコンが待受画面に戻っていた。

「あと、少しだったのに……」

「もうハッキングは無理そうか？」

マイペースに缶ジュースを飲んでいる道理は電気が回復した街を眺めて言う。

「ああ、もう当分は無理だろうな……」

ふー、と一つため息をつき、椅子に体重をかける。

すると、チャラチャラチャラとメールの着信音が部屋全体に鳴り響く。

「！？」

「誰からだ？」

それは成城のデスクパソコンにメールが届いていた。

「上層部からだ」

すると、無意識に二人は画面へと吸い寄せられる。

『やあ、成城君に黒椿君だね。名前は言わなくてもわかるよね。

しかし、今回はやられたよ……

まさか、ハッキングされるなんて、情報組の第七部隊に天才ハッカーがいるなんて実に勿体ない限りだ。

それと、資料でも見たあの男の名は決して、口外にはしてならない。まあ、別に脅しではないが、口にしたら上層部の人間から消されるから言っているんだ。では、今日は非常に楽しかったよ。

——紅桜——

二人はしばし画面に食らい付いたままだった。

「最後の名前は誰だったんだろうな」

道理は立ち上がり、東エリアを見つめる。

「さあな、まあ、また紫電とは闘わなければならない……

それは確かだ」

「しかも、上層部も何か隠している」

成城は立ち直ったかの様に、道理と並ぶ。

「ああ、絶対尻尾を掴んでやる！」

少年達は窓の先にそびえ立つ、巨大な塔——日本民間陸軍討伐組の本部を睨みつけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4334y/>

Chemical Wood

2011年11月29日01時02分発行